

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

金沢友緒

【所属】(助成決定時)

明治大学 研究・知財戦略機構

【研究題目】

近代ロシアの初期語学教育における多言語併記百科事典の役割 : 自国語の形成過程において

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、自国の後進性の克服を切実な課題としていた近代ロシアにおいて、18世紀後半から19世紀初頭に克服の手段として模索された語学教育に着目し、その実態を明らかにすることを目的としている。ヨーロッパ諸地域が経験したルネサンスや科学革命等の文化的興隆を共有することなく18世紀を迎えたロシアにおいて、文化的後進性はロシア文章語形成の立ち遅れに顕著に表れていた。近代国家確立のために当初、優先された西欧文化の積極的受容と外国語教育推進の政策が、自国の言語文化の発達への障碍となったのである。ロシア政府および啓蒙主義者達はこの点を深く憂慮し、近代ロシア文章語の確立を目指してロシア語教育を積極的に展開した。本研究では「外国語と共に学習された自国語」という視点を、エカチェリーナ2世からアレクサンドル1世時代の出版物の理解に持ち込み、特に多言語併記された百科事典とそれに準ずる定期不定期刊行物を取り上げて、ロシア語教育との関係を考察している。

【研究の内容・方法】(800字程度)

エカチェリーナ2世治世(1762-96)の下で強力に推進された言語文化政策と教育改革は世紀を跨いでアレクサンドル1世の時代(1801-25)に引き継がれた。この点を踏まえ、本研究では18世紀後半から19世紀初頭の語学教育において少なからぬ役割を果たした、複数言語併記の百科事典形式の出版物を研究対象の中心に据えた。

そのひとつは、政府官僚で教育事業にも深く携わっていたO.P.コゾダヴレフ発行の『北方郵便』紙において再三推奨された『子供博物館』(1815-1829)である。この雑誌は、動植物、自然現象、機械技術等の項目を、フランス語、ドイツ語、ロシア語の3言語を用いて挿絵付きで説明する百科辞典であり、ドイツでJ.F.ベルトゥッフが編纂した、挿絵付き百科事典『子供のための絵本』(1790-1830)を踏まえ、それにロシア語訳が付したものである。既に『子供博物館』以前にもこのベルトゥッフの本のロシア版の出版が試みられていたが、短期間で中断し、継続しなかった。本研究ではこの中断した出版物も含め、3つの百科事典の関係を比較した。

もう一つの主な考察の対象は、『子供博物館』と同時代に発表された挿絵付き雑誌『幻灯機』(1817-1818)である。19世紀初頭のサンクト・ペテルブルクの住民の様子を描いた挿絵に、身分や職種に応じた会話が付された雑誌で、ロシア語の会話に加えてドイツ語・フランス語の翻訳が記載されていた。『子供博物館』が国や時代を越えた浩瀚な情報を収めた百科事典であったのに対し、『幻灯機』ではペテルブルクの住人に認められるロシア民衆の特徴を読者に伝えることが狙いであった。

本研究では、これら19世紀の複数言語併記の出版物と、18世紀後半、エカチェリーナ2世の時代の言語政策や語学教育の伝統の結びつきを想定し、かつてヨーロッパ諸地域で語学学習の書として高い評価を受け、ロシアでも語学の教科書として指定されていたモラヴィアのコメニウス『世界図絵』(1658)、外国語の物語を3言語で併記した『3言語本』(1779)、ロシア帝国の諸地域に派遣された調査団によって作成された複数言語併記のカタログ『開かれたるロシア』(1774-76)等についての調査と考察を行った。

計画遂行に際しては、当初予定していたロシアでの資料調査は新型コロナウイルス感染拡大を受けて延期せざるを得ず、研究期間を1年延長した。事態が収束をみなかったため、国外調査を国内機関や、デジタル・アーカイブ資料の調査に変え、研究交流、報告もオンラインでの研究会・学会参加の形式になった。

【結論・考察】（400字程度）

本課題の実施において、18世紀後半から19世紀前半ロシアにおける多言語併記の出版物の比較考察により、それぞれが示す特性と編纂の意図だけでなく、18世紀後半から19世紀初頭への継続性が明らかになった。『子供博物館』は国や時代を越えた浩瀚な情報の提供、『幻灯機』はペテルブルクの住人の特性の紹介という編纂上の差異はあるものの、いずれも18世紀後半の語学教育政策の延長線上に捉えられるものであった。『幻灯機』は、ロシアに関心を持つ外国人を念頭に置いたことが编者によって述べられているが、実際には国内向けのものとして、ロシア人読者の間で流通していたことが推測され、語学教育本としても利用されていた可能性が高い。また、諸外国語の物語が複数言語で併記された18世紀後半の『3言語本』とは異なって、『幻灯機』はロシアの都市風俗に題材をとり、掲載された3言語のオリジナルはロシア語であった。民族学研究の視点からも意義が指摘されているこの『幻灯機』は、19世紀初頭には、語学教育がロシア語を基盤とした多言語習得へと変化してきたことを推測させる手がかりとなるものである。この点を明らかにするためには、19世紀前半のアレクサンドル1世時代の教育改革との関係を調査する必要があり、次の課題としたいと考える。